

【一】次の文章は、「記憶の手触り」という主題で書かれた随想である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

記憶というと、**①**野暮な話になってしまふ。私はカボチャとサツマイモをいまも食べない。その理由は戦中、戦後の食糧難である。もう一生分以上食べたから、というのがいいわけだが、私の世代はまだ半分くらいは生き残っているらしく、若い人が「うちのお婆ちゃんも**①**そうです」などと言うことがある。^{*}1 プルーストが「紅茶とマドレーヌの香り」を幼少時の記憶と連想づけたのは有名だが、私の記憶はそれほど**A** 的ではない。単に **B** のための記憶らしいのである。

当時のサツマイモはゆでたイモを数枚に平たく切つて、^{*}2 蓆むしろなどの上で天日で乾燥させたもので、乾燥芋と呼ばれていた。今でも^{*}3 家内
が売り物を買ってくることもあるが、これは私が嫌いなものを知つていて、わざとやっているのである。

カボチャは煮物が今でも普通だが、当時の問題は調味料がなかったことである。出汁だしも醤油しょうゆも味噌みそも砂糖もない煮物とはなにか。いうなれば純粹のカボチャそのもの、**C** 農薬もないから有機で、健康には良かったかもしれないが、私の身体はこれを拒絶するようになったらしい。不思議なのは、その記憶が七十年以上経た現在までしつこく残っていることである。身体のどこでそんなことを記憶しているんだろう。記憶なんだから、身体ではなく、脳かもしれないが、脳の勉強をしてみても、答えは書いて**②**ない。

若手のドイツの哲学者、^{*}4 マルクス・ガブリエルは社会について、生存形式と生活形式を分ける。人間のありようには二つの側面がある、と規定する。「社会は、生存の再生産―これはアメリカ人による進化的な社会理解です―ではなく生活であり、生活とは一つの意味の形態のはずなのです。社会とは単に生存や楽しみの条件を生み出すことではなく、意味ある生活の条件を生み出すことに関わるものです。」(『マルクス・ガブリエル 欲望の時代を哲学する』丸山俊一、NHK出版新書)

私のカボチャとサツマイモの記憶は、戦中戦後のことだから、生存形態としての社会に関わるもので、確かにアメリカ的な問題である。これに反して紅茶やマドレーヌは、かならずしも生存の条件ではない。まさに「意味ある生活の条件」である。この意味とは広義の文化を指すとしてもいいであろう。

編集者から頂いた仮の主題は「記憶の手触り」である。それなのに「記憶」につられてカボチャとサツマイモになり、手触りというより、記憶の体当たりになってしまった。**③**手触りは日本語らしい表現で、欧米では触覚は下位に置かれる感覚である。アメリカの文化人類学者が、

ニューヨークについて、都市は触覚を拒否すると書いたのを読んだことがある。鉄筋コンクリートの建造物の外壁なんか、とうてい触る気にはならない。その点で木造の建物は触り心地がいい。小学生のころ、お寺の*⁵欄干らんかんを走り回って遊んだ記憶がある。いまでは小学校の校舎を鉄筋にするのは、安全のためだというが、安全が文化を破壊する一例であろう。触覚は実は高度の感覚で、目と耳に⑥ヒツテキヒツテキする。この三つの感覚は独自に言語を作ることが可能だからである。目なら文字、耳なら音声言語、触覚は点字である。手触りは触覚を下位に置く文化にはない⑦ガイネンガイネンであろう。

私はネコ好きで、現代の科学はネコを撫なでると血圧が下がる、などという。こういう研究を余計なお世話というので、撫でたら気分がいいのは誰でも知っているであろう。ぬいぐるみを好むのは子どもの常で、私の息子は学校に入るまでは、小さめの毛布をいつも持って歩いていた。手触りがすっかり気に入っていたらしい。

子どもはなんでも触りたがる。触覚という感覚を育てるためにそれは必要なことであろうが、直接ものに触るのは、都市社会では禁忌となることが多い。商品は触らないのが原則である。それで可哀想なのは子どもである。現代の子どもたちはどうやって「手触り」を覚えるのだろうか。都市は人が集中して住んでいるので、人どうしの間の取り方は難しい。他人の身体に触れるのは、通常は禁忌である。私は解剖学を専攻したので、死者の手を解剖するときには、相手の手に触れるしかなかった。これは不思議な感覚で、なぜなら相手の手に直接触れるのは、生きている人では特殊な意味をもってしまふことが多いからである。④死んだ人は特別でしょうと考える人は多いと思う。別に特別ではない。人という意味では死体は立派に人なのである。それをモノだと強弁するのは、頭で想像するだけだからである。

手触りとはずいぶん繊細で微妙な感覚の表現である。私は小さい虫をよく扱うから、わかるのだが、手先の感覚は極めて繊細である。レンズを磨いたり、機械の表面を磨いたりする作業では、熟練工は一ミリの千分の一の単位の違いを感じるといふ。虫をつまんでいると、その感覚がわかるように思う。つまんだ虫が指の間でジタバタしている感じが、虫の種類が違ふと、よく似た虫でも違っていることがわかる。こうした感覚の繊細さを訓練することを、現代社会はすっかりやめてしまった。そういう名人芸に頼るから、日本の工業はダメなんだ。①素人でもできるようにマニュアル化すべきだ。そうすれば人件費も安くつく。②人間のほうをできるだけだけダメにするように、仕事を「合理化」していくのが現代風なのである。

私は歳をとってしまったから、人生をいまさら合理化する気はない。⑤どう考えても不合理なままで生きている。サツマイモもカボチャも

食べたらしいよ、と家族に㉔スめられるが、それでも食べない。人生そのものがどうせ不合理なんだから、とふてくされて思っている。

(養老孟司「カボチャにサツマイモ」〈月刊茶道誌『淡交』令和三年十一月号所収〉より)

*1 プルースト……フランスの小説家(一八七〇～一九二二)。

*2 蓆……わらや竹などで編んだ敷物の総称。

*3 家内……他人に対して自分の妻をいう語。

*4 マルクス・ガブリエル……ドイツの哲学者(一九八〇～)。

*5 欄干……橋や縁側などのへりに設けた腰の高さほどの柵状の工作物。

問一 傍線部㉔㉕について、カタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二 傍線部①「そう」とあるが、どういうことか。「記憶」という語を用いて、四十字以内で答えなさい。

問三 空欄 A・B にあてはまる語として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 身体 イ 脳 ウ 社会 エ 生存 オ 文化

問四 空欄 C・D にあてはまる接続語として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ つまり ウ また エ だから オ しかも

問五 傍線部②「ない」と用法が同じものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 君は悔し涙を流さないんだね。 イ だって、運命だからしかたないよ。 ウ 僕はまだ、諦める気はないよ。

エ 君のように強くはなれないよ。 オ 前を向こう、君は弱くなんかないよ。

問六 傍線部③「手触りは日本語らしい表現」とあるが、どういうことか。七十字以内で答えなさい。

問七 傍線部④「死んだ人は特別でしようと考える」とあるが、これはどのような考え方か。本文中の言葉を用いて、五十字程度で答えなさい。

問八 傍線部⑤「どう考えても不合理なままで生きている」とあるが、あなた自身の生活の中で、不合理だと自覚しながらも変えられないことだわりについて、不合理な点とそれを変えられない理由とを明確にして、百字以内で答えなさい。

【二】次の文章は、瀬尾まいこ『その扉をたたく音』の一節である。ミュージシャンへの夢を捨てきれないまま、怠惰な日々を送っていた宮路は、ある日、余興に訪れた老人ホームで、神がかったサクスの演奏を耳にする。音色の主は、ホームの介護士の渡部だった。「神様」に出会った興奮に突き動かされた宮路はホームに通い始め、やがて入居者とも親しくなり、渡部と二人でホームでの演奏会を行うことになった。次の場面は、演奏会に向けて公園で練習するところから始まる。これを読んで、後の問いに答えなさい。

①それから演奏会まで、毎日のように練習させられた。

渡部君は仕事帰りに俺のアパートにやってきては公園に連れ出し、「サクスは音が大きいから夜は演奏できない」と、俺だけに歌わせギターを弾かせ、横でやいやいと言った。

「もう一度*₁『心の瞳』行きましょう。宮路さん、中学校で合唱されたんですよ。もう少し、₂壮大な感じにしましょうよ」

九月も第三週に入り日差しも残らなくなった七時前の公園で、渡部君は言った。

「ギターで歌ってんのに、合唱みたいになんかならないだろう」

「ベタッとした歌い方この曲には合わないような気がするんですよ」

「悪かったな。どうせ俺は……」

「心の瞳」は、*₂本庄さんとウクレレで演奏するはずだった。そう思うとたまらない。とてもじゃないけど、声をはって壮大になんて歌えない。ギターで前奏を弾くだけで胸が痛いのだ。俺が声を詰まらせるのに、

「また始まった。一人でぐだぐだするのなしですよ。さあ歌ってください」

と渡部君は言った。本当に㊶容赦のないやつだ。

「ぐだぐだしてねえし」

俺はこっそり涙をすすった。

「いちいちふてくされてたら、ミュージシャンどころか、何にもなれません」

「はいはい」

「そもそも宮路さん、なんで泣いてるんですか？ 自分がかわいそうで？」

「違うよ。ちょっと本庄さんのこと思い出しただけだ」

「本庄さんは宮路さんみたいにぐだぐだしていません。何も悲しんでなんかいませんよ」

渡部君がきつぱり言う。

「なんだよそれ」

「宮路さん、どれだけ自分を大事に生きてきたんですか。親しい人に会えなくなって、歌っては涙ぐんで。そんなこと許されるのは幼稚園の年長組までです」

「お前さ、本当にうるさいよな」

物腰の柔らかさにだまされそうになるが、渡部君はけっこうな勢いで人の心の中に入ってくる。いや、渡部君は勢いをつけているだけだ。ここから引つ張り出そうと、意を決して甘え切った俺に踏み込んでくれているのは、俺にだってわかる。

「さあ、歌いましょう。『心の瞳』は話にならないから、*『東京ブギウギ』で。ぱっと盛り上げていきましょう。さんはい」

そして、こんなふう^⑤に他人にゴウイン^⑥に入り込まれたことがない俺は、うっかり従ってしまう。渡部君にどやされながら、俺はぼつぼつと「東京ブギウギ」を歌った。

晴れやかで心が澄み渡るようなメロディー。だけど、その力強さに逆に胸が締めつけられる。俺は四小節ほど歌うと声が震えた。歌はどうしたって涙を誘う。いつだって音楽は、現実をさらに色濃く俺に突きつける。我慢したって心が揺さぶられるのはしかたない。

涙ぐんでしまうのをそう言い訳すると、渡部君は、「え？」と眉根を寄せた。

「今回の演奏って、そよかぜ荘の皆さんにお聴かせするんですよね？」

「ああ、そうだけど」

「宮路さんご自身が歌って感動したりうっとりしたりするために、ぼく、担がれてるんじゃないですよ？」

「ああ」

なんていう言い草だ。俺は乱暴にうなずいた。

「それなら今回は、この曲をきちんとお伝えする。それが目的です」

「なんだよ」

「宮路さんが気持ちよくなりたいなら、カラオケボックスにでも行ってください」

「お前、驚異的に冷酷だよな」

「気づかれました？」

渡部君はにっこりと笑って、「もし苦情言われても、ぼくの家ここからは遠いしいいか。全部宮路さんにかぶせれば。じゃあ、一緒にやりましょう」とサククスを抱え、勢いよく吹き始めた。

はじける音に突き抜けるようなリズム。始まったとたん、心が揺らされる。なんだろう、この愉快なサククスは。俺は歌うのも忘れて、その音に聴き入った。

音楽は日常をよりドラマティックにして感動させてくれる。だらしない失恋やくだらしないいざこざも音楽がともにあれば、美しく切ないものになる。音楽にはどうしたってそういう力があって、俺のつたない歌でも、本庄さんとの思い出を◎彩ってしまう。

「本気で陽気過ぎる。どうやって吹いてんの？」

と聞かすにはいられなかった。

「今のは宮路さんを笑わせようと思って、ちょっとふざけました」

渡部君はサクスを吹き終わると「肩をすくめた」。

まさか笑いはしないけど、その樂觀的な演奏にいろんなものが吹き飛ばされてしまう気はした。

「音楽で感動させるんじゃないやなくて、笑わせるってすごいじゃん」

心を震わせたり、勇気づけたり、励ましたり、涙をあふれさせたり。それが音楽の力だと思っていた。そして、何度もそんな音楽に助けられてきた。でも、単純に愉快で楽しくなる音楽もあるんだ。

大学を卒業した春、親父に町から出ていくように言われ、俺はそのままお袋が探しておいてくれたアパートに移った。家を出る。それなりに④フシメとなることが起きているはずなのに、親父も俺もなんてことないような顔で引越しを済ませた。話したってしかたがない。どうせわかりあえないんだ。俺はそう思い込もうとしていたし、親父も何か言いたげな顔はしていたが、そこを踏み込んでまで俺の中に入ってくるとはしなかった。②お袋は二人の間で、あきれたような途方に暮れたような顔をしていたっけ。

③アパートの部屋で過ごす最初の夜。桑田佳祐くわた けいすけの「明日晴れるかな」をギターで一人歌った。バンドでもやって、大学生の時付き合っていた女の子が好きだった曲。

かみくだかないとよくわからないような、それでいて、どんな状況にもあてはまるような歌詞に、胸を痛めながら何度も何度も歌った。俺はどうして家を出なければいけなかったのだろう。これから俺の居場所はどこになるのだろう。どこを向いて生きていけばいいのだろう。そんな不安が、歌っている間は息をひそめ、歌うたびに薄れていくような気がした。

親父は音楽をやることに反対しているのではない。見通しも持たず、目的もなく生きていくことを危惧きぐしているだけだ。そうわかっているのに、俺は自分のことを認めてもらえないと逃げているだけ。問題の本質はいつも自分で、だからこそ、変えるのは難しく、ただただ漠然ぼくぜんとした気持ちの悪さが残る。そんな靄もやも、歌っている時はかき消されるように感じた。

でも、歌い終われば、何も変わらない現実が、歌う前と同じままの姿で目の前に居座っているだけだった。

だけど、今は違う。渡部君のサクスに乗せて「東京ブギウギ」を歌うたびに、目の前の空気がちゃんと変わっていくのを感じた。

「いいですね。単純に音楽をやるのは」

渡部君はそう言った。

「ああ、どうしてこんなに楽しいんだろう。俺は無職で先も見えてなくて、本庄さんは二階からいなくなったっていうのに」

「たぶん、どんな状況の中にも、明日やその先にすてきなことが待ってることをぼくたちは知ってるからですよ」

「そうなのかな」

「ええ」

渡部君はうなずいた。彼が言うと、どうしてだろう。ものすごく確かなことのように思える。いや、俺だってそれが本当のことだって知っている。

高校生のころの俺は、自分を受け入れられなくなるほど落ち込むことがあっても、すべてが終わったような絶望を味わっても、また笑い転げられる日々が来ることを、心を揺らすべきことが待っていることを、知っていた。それを俺に伝えてくれたのは、音楽ではない。

高校一年生の夏。ギターを始めた俺のもとに、麻生あそうが来て村中が来て香坂が来て。終わりたくない時間がやってきた。

村中が三回連続で失恋した時は、みんなでやけ食いだとマクドナルドをたらふく食べて吐きそうになったっけ。麻生とけんかして二週間口を利かなかった時は、本気でつらかった。でも、仲直りをしたとたん、なんでも話さずにはいられない仲になって、「どれだけ話すことがあ
るの？」とお袋にあきれられながらも毎晩長電話をしていた。香坂が最後に大学合格を決めたときは、自分のことのようにほっとしたんだよ
な。そして、恵まれた環境にどうしていいかわからない自分がいることを話せたのも、この仲間たちだ。

なんとかやり過ごしていただけの一日は、たくさんの感情であふれる一日となった。音楽は、それを連れてきてくれただけだ。俺が何年も
の間あきらめきれずにしがみついていたものは、ギターを弾くことや歌うことではなかったのかもしれない。④ずつと手にしたかったもの。
きつと、それは音楽ではない。

(瀬尾まいこ『その扉をたたく音』より)

*1心の瞳……歌手坂本九の歌った楽曲。合唱曲版は、坂本九の生前最後のラジオ番組で「心の瞳」を聴いた中学校の音楽教師が、生徒の合唱のために編曲をして広まった。

*2本庄さん……老人ホームで宮路は、本庄さんにウクレレを教えていたが、ある日本庄さんが、重度の認知症にんちしやうに陥りおちい、宮路が誰だれであるかもわからず、暴れ出してしまった。

*3東京ブリウギ……歌手笠置シズ子の歌唱によるヒット曲。軽快なブリウギのリズムに乗った戦後を代表する歌謡曲。

問一 傍線部②～④について、カタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二 傍線部ハ・ニの本文中における意味として最も適切なものを、次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ハ 壮大な

ア スケールが雄大で立派な

イ 勇気が満ちあふれてくるような

ウ 厳かで気高くも神聖な

エ 陽気でユーモラスな

オ 心に届くように情感豊かな

ニ 肩をすくめた

ア 困らせたことを謝るときの様子

イ 確信がもてないときの様子

ウ 恥ずかしい思いをしたときの様子

エ 誇らしげな態度をとるときの様子

オ 思いが伝わらずもどかしいときの様子

問三 傍線部①「それから演奏会まで、毎日のように練習させられた」とあるが、練習に取り組む姿を通じて描かれる、宮路、渡部の音楽に対する考え方の違いを、それぞれ四十字以内でわかりやすく答えなさい。

問四 傍線部②「お袋は二人の間で、あきれたような途方に暮れたような顔をしていたっけ」とあるが、このときの二人（親父と俺）の置かれた状況について説明したものととして、最も適切なもの次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 親父はミュージシャンになるなどという見果てぬ夢ばかり追いかけている息子に愛想を尽かし、俺は親父から見放されていることに反発しながらも道を見失っている状況。

イ 親父は音楽でも何でもいいから将来への目標を見つけて生きていってほしいと思いい、俺は俺で今の自分があるがままの生き方を認めてほしいと願っている状況。

ウ 親父は何を言っても聞き入れようとしない息子に家を出て行ってほしいと思いい、俺はこれからどうやって生きていけばいいのかわからず困り果てている状況。

エ 親父は将来への目的も持たずに漫然と日々を送っている息子を陰ながら心配し、俺はそんな親父の思いを理解しながらも自分を変えることができずに逃げている状況。

オ 親父は息子にミュージシャンの夢を追い続けてもらいたいとことあるごとに応援し、俺はそんな親父の期待に思うように応えることができず、はがゆい思いをしている状況。

問五 傍線部③「アパートの部屋で過ごす最初の夜」に、宮路はギターで一人、「明日晴れるかな」を歌う。歌っている時、歌い終わった時の宮路の気持ちの変化について五十字以内で簡潔に答えなさい。

問六 傍線部④「ずっと手にしたかったもの。きっと、それは音楽ではない。」とあるが、「ずっと手にしたかったもの」とはどのようなものであったのか。七十字以内で答えなさい。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

むかし弓を*1たしむ人あり。ひとり夜道ゆく。おのがわざなれば、秘めにし弓に矢を十筋取りそへていでけるが、また道にて小竹原ささはらに入りて、篠しのを一本切り、矢のたけにくらべ、根をそぎ、*2筈はずをつけて、十筋の矢に取りそへてもちけり。

さてゆくに、道の真ん中に、その色くろきものあり。人よりは①ちひさうちひさうして、さらに動かず。「のけ」といへどいらへず。「いかさまに、きつね*3むじなるべし」とおもひ、②矢をはなちて射るに、手ごたへしてあたると見しも、飛びのく音、かねなど射るがごとし。しかれども、やをらはたらきもせず。また射るもはじめのごとし。一筋一筋と射るほどに、十筋みな射て、ただ一本のこれり。このとき、③かのもの動きて、うへに*4かづきし物をわきへのけて、飛びかかるを、のこる一筋にて射とめたり。さて間近く見れば、たぬきにて、うへにかづきはなべなり。おそろしきたくみにあらずや。その十の数しりにや。また十は数の常にして、ものごとこれを*5用ゆ。たぬきすらそれを繰りてうかがふ。④まして人なんどの智ちにはかんがふべきをや。切りそへて十一にしてゆきしは心にくくはべる。⑤秘事はまつげのごとく、これ弓法の徳なりといへり。

『御伽物語』より

*1たしむ…たしなむ

*2筈…矢の上端で、弓の弦をかける部分

*3むじな…アナグマ

*4かづき…被る

*5用ゆ…用いる

問一 傍線部①「ちひさう」の読みを現代かなづかいで書きなさい。

問二 傍線部②「矢をはなちて射るに、手ごたへしてあたると見しも、飛びのく音、かねなど射るがごとし」とあるが、それはなぜか。三十字以内で答えなさい。

問三 傍線部③「かのもの動きて」とあるが、なぜ動き出したのか。三十字以内で答えなさい。

問四 傍線部④「まして人なんどの智にはかんがふべきをや」とあるが、これはどういうことか。その解釈として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア たぬきですら用心深く相手を観察する。まして人間が他者と接する際は相手の様子や行動によく注意する必要があるということ。
- イ 弓の熟練者ですら正確に標的を射抜けないことがよくある。まして初心者はおさらなので矢を多く携行すべきだということ。
- ウ たぬきですら考えをめぐらせて人間を陥れようとする。まして人間のたくらみには充分に気をつけておく必要があるということ。
- エ 弓の熟練者ですら動物を容易には射止められない。まして初心者にとってはもつと難しいので日々の鍛錬が必要だということ。
- オ たぬきですら悪だくみをするならば許してはならない。まして人間の悪事はなおさら放っておくわけにはいかないということ。

問五 傍線部⑤「秘事はまつげのごとく」とは「秘伝は案外身近なものであるが、容易には気づかれないまつげのようなものだ」という意味であるが、ここでいう「秘事」とは誰のどのような行為か。五十字以内で答えなさい。

受験番号

名前

一					
問八	問七	問六	問三	問二	問一
			A		㉑
			B		㉒
			問四 C		
			D		
			問五		
					㉓
					㉔
					問二 i
					ii

二				
問六	問五	問四	問三	問一
			渡部	㉕
			宮路	
				㉖
				㉗
				問二 i
				ii

三														
問五	問四	問三	問二	問一										

受験番号

名前

一										
問八	問七			問六			問三	問二	問一	
	持	か	死	と	化	触	触	A	ヤ	戦
	た	ら	ん	い	に	り	覚	オ	や	中
	な	、	だ	う	独	一	が	B	サ	、
	い	死	人	こ	特	は	下	エ	ツ	戦
	と	者	は	と	の	、	位	問四	マ	後
	い	の	一	、	触	に		C	イ	の
	う	手	モ		織	覚	置	オ	モ	食
	考	に	ノ		細	を	か	D	を	糧
	え	触	一		で	高	れ	イ	食	難
	方	れ	で		微	度	る	問五	べ	の
	。	る	あ	⑥	妙	の	欧	オ	た	記
		こ	つ		な	感	米		が	憶
		と	て		感	覚	と	問三・四各②点	ら	と
		は	一		覚	と	は	問五③	な	結
		特	人		の	捉	異		い	び
		殊	一		表	え	な		こ	つ
		な	で		現	る	り		と	く
		意	は		で	日	、		。カ	
		味	な		あ	本	一			ポ
		を	い		る	文	手			チ

⑨

③

①×5

二										
問六			問五			問四	問三			問一
の	が	れ	落	覆	く	歌	エ	渡部	宮路	④
ふ	待	て	ち	つ	が	つ		か	音	と
れ	つ	い	込	て	、	て	⑥	せ	楽	、
あ	て	て	ん	い	歌	い		、	は	自
い	い	も	だ	く	い	る		楽	曲	分
。	る	、	り	。終	時			し	を	自
	こ	明	絶		わ	は		ま	聴	身
	と	日	望		れ	不		せ	い	を
	を	や	し		ば	安		る	て	感
	感	そ	た		何	や		た	く	動
⑩	じ	の	り	⑥	も	心		め	れ	さ
	さ	先	と		変	の		に	る	せ
	せ	に	ど		わ	靄		あ	人	る
	て	は	ん		ら	が		る	に	力
	く	心	な		ぬ	薄		も	き	の
	れ	揺	状		現	れ		の	ち	あ
	る	ら	況		実	消		。ん	る	を
	仲	す	に		が	え			と	も
	間	日	置		心	て			伝	の
	と	々	か		を	い			え	。た

④

④

③×2

三										
問五	問四	問三	問二	問一						
事	、	弓								
態	さ	を	ウ		ちいそう					
に	ら	た	④							
備	に	し			②					
え	一	な								
た	本	む								
行	の	人								
為	矢	の								
。加	を	、								
⑥	え	の								
	て	常								
	持	で								
	ち	あ								
	歩	る								
	き	十	④	④						
	、	本								
	不	の								
	測	矢								
	の	に								